

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730405

研究課題名(和文) 16 - 17世紀フランス会計の実証的研究 - 最古の会計規定生成史 -

研究課題名(英文) Empirical Research of 16th to 17th Century French Accounting: History of the Creation of the Oldest Accounting Rule

研究代表者

三光寺 由実子 (SANKOJI, Yumiko)

和歌山大学・経済学部・准教授

研究者番号：60549301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フランスにおいて本格的に複式簿記が普及し始める16世紀から、1673年のフランス商事勅令に至るまでの、フランスにおける会計システムの変遷を解明することにあった。そのために有益な資料と思われる電子ジャーナルComptabilite(S), revue d'histoire des comptabilitesの分析を行うことを試みた。着目すべきは、当該ジャーナルの掲載論文には、複式簿記への言及をおこなった論文が存在していた点である。これに加え、当該ジャーナルの貢献は、会計帳簿の様々な見方を提示し、会計史研究の分析手法に多くの可能性が秘められていることを示した点にあった。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to clarify the changes in the accounting system in France from the 16th century, when double entry bookkeeping really started to spread, until the Ordonnance de Commerce (codification of commercial laws) of 1673. Analysis of the electronic journal Comptabilite (S), revue d'histoire des comptabilites was conducted since it is a useful material for such purposes. A point to be noted is that there were papers in the journal that referred to double entry bookkeeping. Furthermore, contributions to this journal indicate various perspectives on account-keeping, suggesting that analysis techniques for research on accounting history are filled with possibilities.

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：会計学

キーワード：会計史 フランス

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの研究成果

申請者は、2004年から2011年まで13-14世紀フランス商人・銀行家の手によって示された、数少ない会計帳簿の現存史料を紐解き、中世ヨーロッパにおいて複式簿記を解説したテキストが登場する以前の簿記を、実証的に解明してきた。研究成果として、以下のような発見事項があった。

すなわち、13-14世紀の中世ヨーロッパ会計史は、その背後にある経済的史実をなぞらせるかのような流れ—イタリア商人以前に十字軍の中の一組織であるテンプル騎士団が独自の簿記を確立していたこと、その技術は13世紀末にテンプル騎士団の廃絶と共に消えていったこと、14世紀以降はイタリアの諸都市のみならず、フランスでも商人が、勘定記録による記帳を行っていたこと、かつその形式はイタリアで既に用いられてもいた複式簿記ではないが、イタリアの記帳実務とかけ離れてはいないこと—をもっていた。ただし、取り上げた会計帳簿は未だ限定的であり、フランス会計史の氷山の一角を述べたにすぎない。イタリアやその他近隣ヨーロッパ諸国に比較し、残存史料が稀少であるという点で、中世フランス会計史研究が困難であることは否めないと結論付けた。

(2) 本研究の動機と意義

上記のような現状があるものの、中世フランス会計史研究の開拓・解明には、分析対象を増やして検討することは不可避である。

このような研究成果を踏まえ、研究対象とする時代を進め、本格的に複式簿記が普及し始める16世紀以降に焦点を当て、1673年のフランス商事勅令を一つの到達点として、ここに至るまでのフランスにおける会計システムの変遷を実証的に解明したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フランスにおいて本格的に複式簿記が普及し始める16世紀から、1673年のフランス商事勅令に至るまでの、フランスにおける会計システムの変遷を実証的に解明することにある。

3. 研究の方法

研究期間の初年度である平成23年度において、単に16-17世紀フランスにおける特定の会計帳簿にのみに焦点を充てるのでは、既存研究を必ずしも発展させるとはいえないと結論付け、平成24年度においては本研究の主旨に最も見合う、有益な資料と思われる *Comptabilite(S), revue d'histoire des comptabilites* の分析を行うことを試みた。

(1) *Comptabilite(S), revue d'histoire des comptabilites* の創刊の背景

Comptabilite(S), revue d'histoire des comptabilites は、近年フランスにおいて行

われた会計帳簿に関する研究プロジェクトの成果を集約した電子ジャーナルである。

その研究プロジェクトとは、フランスのリエール第3大学 (Universités de Lille 3) を拠点とし、フランスならびに近隣諸国の分野を問わず会計文書を扱う研究者によって遂行されている「*Enquêtes historiques sur les comptabilités - XIVe-XIXe siècles* (14世紀から19世紀における会計史研究)」である。当該プロジェクトは三つ領域に分岐されている。すなわち、写本学や公文書学的なアプローチからの中世ヨーロッパ会計史研究、1500年から1850年までのヨーロッパにおける公会計史研究、そして19世紀のヨーロッパにおける財務管理の組織と機能の研究である。

(2) *ComptabilitéS, revue d'histoire des comptabilités* の特徴

以下は、*ComptabilitéS, revue d'histoire des comptabilités* 創刊の辞での言及である。

ヨーロッパ会計史研究は、これまで社会科学における「管理の科学 (Sciences de Gestion)」に主眼が置かれてきた。特に商人等の私的会計帳簿に関しては、その研究は発展している。他方で、公的会計帳簿においては、制度的側面に着目した研究が多くあるが、管理科学に関する研究、例えば、中央と地方における管理組織の標準化や文化変容 (acculturation)、公的な組織の中での商人の知識の普及、模倣となる会計技術の伝播とその実施の分析等については未だ検討されることが稀であるという。

一概に会計文書といえども、その種類は多岐に渡るが、そこで行われる研究は、記録作成やの知識や能力を復元させるものでなければ意味がない。他方で、会計史とは思想の歴史でもあるという。また会計史は、経済や財務の歴史であると同様に、社会と政治の歴史という側面もある。つまるところ、会計史とは、環境と社会的要請の変化に対応した会計の思想、実務、制度の進化を検討するものである必要があると、ここでは主張される。

要するに、*ComptabilitéS, revue d'histoire des comptabilités* は、会計帳簿の研究に際しての、多角的なアプローチの必要性の認識の下、公刊されたといえる。

4. 研究成果

当該ジャーナルは、2010年以降、既に4号が公表されているが、そこからアプローチの多様性がうかがえた。創刊号 (2010年) は雑録集 (Varia) ということもあり、扱う会計文書の時代は15世紀から20世紀後半までと多様である。しかしながら、その後は各号に統一的な問題意識をもった論文が編集されている。第2号 (2011年) は「中世における会計文書の写本学的アプローチ (Approche codicologique des documents comptables du

Moyen Âge)」、第3号(2012年)は「近代ヨーロッパにおける管理の目的および形態 (Objets et formes du contrôle en Europe à l'époque moderne)」、第4号(2012年)は「中世会計における語彙とレトリック (Le vocabulaire et la rhétorique des comptabilités médiévales)」を統一テーマとしていた。

着目すべきは、当該ジャーナルの掲載論文には、複式簿記への言及をおこなった、論文がいくつか存在していた点である。例えば、第3号(2012年)の掲載論文には16世紀後半、スペイン王国の支配下にあったパレルモにおける財政管理に焦点を当て、スペイン王室が16世紀に早くも公会計分野において、複式簿記の使用を法規制下で定め、会計技術の近代化に重要な貢献をもたらしたことを表しているものがある。さらに、同号における別の掲載論文ではセビリヤの通商院国庫における会計文書(1503-1717)において複式簿記が採用された経緯と、その内容や使用された帳簿について述べている。

これに加え、当該ジャーナルの貢献は、会計帳簿の様々な見方を提示したことにある。第1号は例外とし、統一テーマにもとづき、論文が集められているがゆえ、読者は会計史研究の分析手法にいかにより多くの可能性が秘められているのかを知り得る。

以下は、各論文の概要一覧である(第1号から第3号までの「Articles」、第4号の「Dossier(問題、テーマ)」以下に書かれた論文、および著者名の記載がある第3号の「Éditorial(論説)」について記載)。

各論文の概要

号 (発表年)	要旨
1 (2010)	1400年から1404年のブルゴーニュの城主の会計記録における写本学的研究。紙質、記録の構成、記録内容、ページ内での各種情報の配列、金額表記等を詳述。
1 (2010)	フランス人 Benoit-Marie Dupuy による、1746年から1758年までのネーデルラントの会計改革の分析。
1 (2010)	18世紀ロシアにおける簿記書の登場、伝播について考察し、それがロシアにおける近代会

	計的な思考の発端となったと言及。
1 (2010)	<i>Traité des comptabilités occultes</i> (1884)の著者 Victor de Swarte が考案した会計手法の公会計への影響と功罪を詳述。
1 (2010)	Jean Fourastié が、第二次世界大戦後、国家における会計実務の中で、特に保険分野で果たした役割を考察。
1 (2010)	1993年版国民経済計算(SNA)に至るまでの歴史的経緯、ならびにSNAと企業会計との関係性について、貸借対照表、価値評価に関する論点を中心に詳述。
2 (2011)	13-15世紀における会計記録の写本学研究における視点と本号(第2号)の貢献を概説。
2 (2011)	13世紀中葉から14世紀中葉におけるノリッチの小修道院の荘園会計を支えた巻物の写本学研究。巻物の形態や、そこで付された傍注の役割等に着目し詳述。
2 (2011)	アルトア地方の Mahaut 伯爵夫人の時世(1302-1329)における二種の会計記録に関する、写本学的見地に立った比較研究。
2 (2011)	14世紀におけるアルトア地方での政治の変化がもたらした、Hesdinの管轄区域での会計の変化を詳述。
2 (2011)	les Archives secrètes du Vaticanにて保管の大司教の代官職によって書かれた会計記録の形態を中心に検討。

2 (2011)	カルヴァドスの古文書館が所持する 15 世紀末から 16 世紀初頭の会計文書のうち四つを選び、記録の体裁、タイトル、内容、装飾等を写本学的に検討。
2 (2011)	1384 年から 1450 年までのブルゴーニュ公領とブルゴーニュ伯領の会計記録における帳簿作成上の共通規範の存在を考察。
2 (2011)	15 世紀におけるパリ市民病院の会計文書の記帳の形式や装丁等を写本学的に研究。
2 (2011)	14 から 15 世紀におけるディジョンの都市会計簿に関する写本学的研究として、媒体、文書の構成や形式、余白の役割等を考究。
2 (2011)	ポルトにおける 15 世紀後半の九つの都市会計に係る年次記録について、記録の構成や体裁、そこで行われた三つの検証、すなわち自己検証、翌年の検証、王の代理人による証明等に関して言及。
3 (2012)	中世後半から 19 世紀における、政治史に関連した六つの会計史の研究論文を扱う本号 (第 3 号) の貢献を概説。
3 (2012)	18 世紀における財務監督官 Trudaine の指揮下にあった財政管理、特に土木局の管理部門でのそれ関連して考察。
3 (2012)	Emmanuel Philibert ならびにその息子 Charles Emmanuel I の治世下で行われたサヴォワのガレー船の管理に際する会計的側面を考察。

3 (2012)	18 世紀後半西インド諸島に関する財政管理システムに対する、スペイン王室の財政管理の影響を分析、検討。
3 (2012)	セビリヤの通商院国庫における会計文書 (1503-1717) において複式簿記が採用された経緯と、その内容や使用された帳簿について言及。
3 (2012)	スペイン独立戦争 (1808-1814) 下に、それまでの専制的な財政管理から、予算の管理メカニズムや公会計の在り方を変えた財政改革について考察。
3 (2012)	スペイン王国の支配下にある 16 世紀後半における、シチリア島の中心都市、パレルモにおける財政管理を中心に検討。
4 (2012)	本号 (第 4 号) に先立ち、中世における会計の用語とレトリック研究に関する方向性を提示。
4 (2012)	カーンの子爵がパリの会計法院に提出した会計記録 (1475-1476、1490-1492) における、会計法院での綿密な調査について検討。
4 (2012)	14 世紀から 16 世紀までのノルマンディー東部の会計記録における構造とレトリック等を考察。
4 (2012)	ルクセンブルクの税収に関する会計記録について、14 世紀末の王室でのものから 15 世紀中葉のブルゴーニュ人の管理下におけるものまでを検討。
4 (2012)	シュル＝モセルの出納係の会計記録 (1429-1510) をもとに、文書の構造に関するレトリック

	ク等を検討。
4 (2012)	第2号(2011)の続編。アルトア地方のMahaut伯爵夫人の時世における会計記録の複写物(1303-1304)を対象とし、巻物形式から帳簿形式へと変わった会計記録について、用語の変化と連続性について言及。
4 (2012)	14世紀を主としたリールの都市会計簿に関する、余白を使用して行われた、表示上の技術に関する研究。
4 (2012)	ブルゴーニュ公領における1386年のPhilippe le Hardiによる規定と、1411年のJean sans Peurの規定の中で用いられた、良き会計の実践のための用語と、1384年から1450年までの同公領内の会計実務を比較検討。
4 (2012)	15世紀のブルゴーニュ公爵Philippe le Bonの治世下における一連の財政収入と支出について考察し、会計手法の発展を提示。
4 (2012)	1370年から1409年までのフォレ地方の財務官を務めたÉtienne d' Entraiguesの会計記録における語彙、言語、説明手法について考察。
4 (2012)	同一帳簿内で、1397年から1398年に行われた上記イエールの財政管理と、断続的に行われたイエール個人の財産管理とが混在する会計帳簿について分析。

4 (2012)	ポルトの都市会計簿(1450-1497)の中で用いられた会計用語について考究。
4 (2012)	本号(第4号)の総括。

(研究代表者作成)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

①三光寺 由実子、*ComptabilitéS, revue d'histoire des comptabilités*に見るヨーロッパ会計史研究の現状、産業経理、査読無、第73巻、2013、167-175

6. 研究組織

三光寺 由実子 (SANKOJI, Yumiko)
和歌山大学・経済学部・准教授
研究者番号: 60549301